

獅子文六

信子

おばあさん

獅子文六

信子・おばあさん

著者との了解に
より、検印を廃
止いたします

信子・おばあさん

定価／四五〇円

発行／昭和四十四年三月初版

昭和四十四年四月一日五十版

著者／◎獅子文六

発行者／石川数雄

印刷所／凸版印刷株式会社

発行所／株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台一の六

郵便番号一〇一

振替東京一八〇番

電話東京(二九四)一一一一(大代表)

もし落丁、乱丁その他不良な品がありましたら、おとりかえ
します。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

信子・おばあさん・作者



獅子文六氏

獅子文六氏へのインタビュー
と、NHKテレビの場面ほか

——「信子」を「主婦の友」にご執筆当時（昭和十三年十月～十五年二月連載）は、日支事変の軍事費のために、税金は重く、物価は上がり、深刻な世相でした。その中で、「信子」が生まれたいきさつを伺いたいのですが。

獅子 あのことろ、どういふものか、漱石の「坊ちゃん」が再認識されて、私のところへも「主婦の友」から、「胡椒息子」が完結したら、引きつづいて、「坊ちゃん」のようなのを書いてくれませんか、と注文がきたんですよ。「坊ちゃん」は、子どものときから私の愛読書だし、書いてみようという気持ちになってね。もともと、主人公を女にし

テレビの題名は「信子とおばあちゃん」——信子役の大谷直子と、おばあちゃん役の毛利菊枝



て、地方から東京に出てくるといふ構想で、すべて逆にいったんだが、主人公の性格は変えたくなかった。「信子」は、単純で明るくて、正義感にあふれてるんです。

——「信子」の女学校の先生たちに、あだ名がついていて、女の校長のあだ名は「宇垣さん」ですが、宇垣一成陸軍大将のことですね。

獅子 そうそう。あの当時、広田内閣が倒れたあと、宇垣さんに組閣の本命がくだった。私は

当時、千駄ヶ谷に住んで、組閣本部が近所でもあったし、印象が深いんだが……ところが軍部は、かつて軍縮をやった実力者である宇垣さんの内閣には、陸軍大臣は出さぬといつて、とうとう流産させてしまった。こういう軍部の横暴を国民が憎んで、宇垣大将に国民の同情が集まって、丸顔の大将の写真や漫画が、よく新聞に出ましたよ。

そこで「信子」の学校の校長は、非常に頑固な昔風の人だが、人間は正直。女でありながら、宇垣陸軍大将と顔が似てる、そんなところにも、おかしみがあつたんですがね。教頭の「ニヤリスト」というあだ名は、ある女学校でほんとにあつたニック・ネームです。

「おばあさん」をご執筆のころ（昭和十七年二月―十九年五月「主婦の友」に連載）になりますと、文学作品の上にも、陸海軍報道部や情報局が、「検閲」による削除命令、執筆停止命令という絶対権をふるいましたね。

獅子 だから、びくびくしてる人が多かった。

——しかし「おばあさん」には、さすがの検閲も、何も言えなかつた。かといつて、作品は、時代に迎合するどころか、当時オールマイティーであつた東条内閣にさえ、鋭い風刺が浴びせてあるほどです。幅広い読者は、暗いふんいきを忘れて笑い、楽しみ、感動しました。作品を貫く新鮮で知的なユーモアと、健康な人間観が、あの検閲をもつき抜けてしまった、という感じですが。

獅子 とにかく、「検閲」の方針として言つてることが、非常に幼稚、単純で、表面的で、いくらでも抜け道があつたわけですよ。少し工夫すればいい。恋愛はいけないというけど、恋愛でなくても、書くことはたくさんある。だから



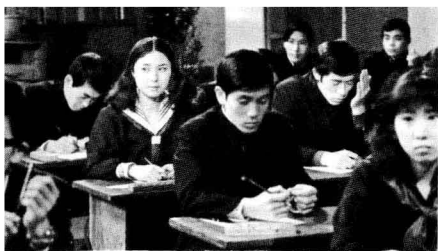
こっちは、「文句のつけようがないだろう」という気持ちが常にあつて、ちつとも拘束されなかつた。かえつておもしろいぐらいだったな。

——「おばあさん」のテーマについて、どうぞ。

獅子 あれを書いた当時は、戦争の成り行きを心配しながら、明治初年生まれのおばあさんで、隠居部屋でしずかに死を待つてゐる、というような人がまだ生きてました。そういうおばあさんの中には、息子夫婦なぞより、かえつて、偏見のないりっぱな常識を持つてゐる人がいましたね。偏見がないから、孫たちの、若い者たちの気持ちがよくわかるのです。そんなおばあさんが、うちの親類なんかにもいたんですよ。

大学入学試験場での信子

試験の様子を友だちに報告中



信子の生家は、おちついたかやぶきの家



彼女たちは、儒教的な教育も受けてるが、明治初期の女学校教育はミツシヨンが多かったので、自由主義的な思想もあり、その混合がおもしろいんですね。それと、人間のスケールの大きいところがあつた。包容力があり、度胸もよかつた。だから、新劇に夢中になつてゐる末っ子の三平や、孫の丸子に、理解をもつて味方するでしょう。そういうおばあさんが、家族と人生とに持つてゐる「用」というものを、考え直してみたかつたんですよ。

—— 相馬黒光さん（編注 新宿中村屋の創業者相馬愛蔵氏夫人で、その文才をうたわれた）が、おばあさんのモデルですか。

獅子 いや、私の「おばあさん」のイメージと、黒光さんとは違う。黒光さんは鋭くて、芸術家的でしたからね。そういうアマが生まれたのは、「おばあさん」の連載を始めてだいぶたつたころ、「主婦の友」の記者が来

て、黒光さんに会ってみませんかと言う。明治の女書生の代表である黒光さん、という意味で、その記者につれられて、一度会つたことがあるんですよ。「おばあさん」のイメージとは、少しちがつてました。

—— 最近の大学紛争を、「おばあさん」は何というでしょう

獅子 教師を「お前」と呼ぶような連中の味方はしないでしょね。「おばあさん」は虚礼好きではないが、礼儀を尊ぶ人ですから。

—— 「続・おばあさん」をお書きになるお気持ちはありますか。

獅子 全然なし。一度書いたものはもう書かない。それに「おばあさん」が生きてたつて、完全モ―ロクですよ。（笑）百にはなつてゐる。

—— NHKテレビでは、毛利菊枝さんがおばあさん役ですか。



獅子 そう、私が岸田国士と新劇研究所をやったとき

(編注 昭和三年)の、第一回研究生でね。

—— 芸名「毛利」は先生の命名だそうですね。

獅子 本名が「森」だから、ちよつと変えてね。こないだ、信子役の大谷直子君がきたときに、「毛利のおばあちゃん」は、なかなかきびしいから、しかられるかもしれないよ「って、おどかしといた。(笑)なにしろ、新劇魂でこりかたまつた婆さんですからね。

—— ご執筆時間は、午前中ですか。

獅子 そう。午前、仕事。午後は人と会う時間。夜はハイボール一杯に、日本酒一合の晩酌をやつて、早寝するから、人には会いませんね。

—— 先生は、三十数年間、原稿「切に一度もおくられたことがありませんか。

獅子 「切に追つかけられると、ソワソワして、作品に影響しますね。それに、たくさん書かないから、

切に間に合うのでしよう。

—— 先生は、こわいほどきびしい人間評価、社会批判の目で、複雑微妙な人間心理や、むずかしい社会の動きに、鋭く深いメスを入れられるのですが、しかも読者には、一読、実によくわかるのです。こころよいリズムにのつて、らくらく読みながら、作者の意図を確かに受けとっていますか……

獅子 私の文章がもしわかりいいとしたら、それはフランスに長くいたことと関係があるかもしれません。

(編注 大正十一年―昭和二十八年の間に、前後三回、おもにパリ滞在)

フランスへ行く前に私が書いてた文章は、とても晦渋なものが多かった。ところがフランスへ行つてみると、反対なんです。文章をクレールに書く――平明に書くということが、文章道の常識とされている。私は、それがほんとうだと思った。わかりやすく、生きた文章を書かなくちゃいけない。特に「主婦の友」のような、おおせいの人に読んでもらう作品は、「平明」





ということが非常に必要です。しかし、そういう文章はなかなかむずかしい。文学青年的な自分がつての文章のほうが、書きやすい。

いったい、文章を平明に書くということは、福沢諭吉もやかましく言いました。福沢と私の父との関係もあって、子どものときから、私も慶応義塾に学びましたから、その影響も多少あるかもしれませんね。(編注 先生のご尊父岩田茂穂氏は、福沢諭吉の愛弟子で、そのいきさつは、名作「父の乳」に詳しい)

ただ、平明ということは、平凡になりましたが、それがいちばんこわい。平明な形で、生命にあふれた言葉が書ければ、いちばんいいんですよ。

——先生の作品の主人公は、心のあたたかい、ふくらみのある人物です。また、救いがたい悪人は出てきません。先生は、人間のどんな点を憎み、愛されるでしょうか。

獅子 特に意識して書いているわけではないが、結果を見ると、私はやっぱり、自分の好きなタイプの人間を、よく作品の主人公に書いているようです。そして、好きな人間というのは、



信子やおばあちゃんがよく散歩する佐賀市の公園

結局、私自身の持っていない性格、私の性格と正反対の人間像、ということになりますね。たとえば「南の風」の六郎太、「自由学校」の五百助など、私の性格と正反対。私は、自分の性格がちつとも好きじゃありません。もつとも、五百助の妻の駒子の性格は、五百助と正反対じゃないか、と



小宮山信子の家族とおばあちゃん（右より）兄武司Ⅱ伊藤孝雄 信子Ⅱ大谷直子 おばあちゃんⅡ毛利菊枝 母邦子Ⅱ加藤道子 弟克己Ⅱ高塚徹

フナ釣りに絶好の佐賀市郊外の小川



いうことになるが、主人公の相手役として、そういう性格も必要でしよう。私自身、駒子のようなのは、自分の細君としては困る。

—— どうしたら、ユーモア、風刺の精神を身につけることができるでしょうか。

獅子 生まれながらに持つてると、欠けてる人はあるとしても、まず第一条件は、世の中の現象とか、人間とかを、一步退いてながめることでしようね。すると、批評という作用が行なわれる。批評が、おもしろいとか、おかしいとかいう心情を喚起するでしよう。それだけのことですよ。

もつとも、ある場合には、苦笑とか、怒りだとか、憎悪まで生まれてくる。それから風刺が出てくるのでしようけれど、やはり、一步退いてながめることから始まるでしよう。

これは、文章の問題ではない。文章を書かない人でも、機知やユーモアに富む会話をする人がいますね。

しかし、みな、一步退いてものを考え、そして一步退いてものを言うことを、知ってる人たちですよ。

—— いろいろありがとうございました。



「信子とおばあちゃん」の郷里
佐賀市内には堀り割が多い



「信子とおばあちゃん」の
スタジオ風景



信子・おばあさん・作者……………口絵

獅子文六氏へのインタビューと
NHKテレビの場面ほか

信子……………11

おばあさん……………133

信

子

富士山だけは、りっぱだと思った。

こんなりっぱな、すばらしい山は、生まれてから見たことがない。季節がら、雪はほんの少し、山褌にコビリついてるだけだが、半面に、朝の日の金粉を刷いて、におい立つ紫の全姿の美しさ。一目見て、文句なく頭がさがる。霊峰とは、よく名づけたものだ。山の一流品だ。超特作だ。郷里の彦山や、八面山は、これにくらべると、遺憾ながらだいぶ品が落ちる。メリンズと羽二重以上の違いがある。

静岡付近から沼津までの間、富士山ばかりながめていたので、首が少し痛くなった。沼津駅へ、列車が止まっても、名映画を見たあとのように、頭がぼんやりしていた。

「お弁当、たいめし！」

その声を聞いて、ハッと我に帰ったら、急におなかが減ってきた。プラットホームの時計は、七時十分をさしている。道理で、おなかのすくわけだ。郷里にいれば、朝飯は六時と、判で押したように、きまつてゐる。

お弁当を買って、今度はお茶を買おうとすると、

「買ってあげましょう」

と、前に腰かけてる青年が、窓から首を伸ばした。

見くびってくれては困る。いくらいなか者だって、お茶ぐらいは、自分で買える。

「いらんですわ」

と、あたしがいったら、仏頂面ぶつどうめんをして首を引つ込めた。

やがて、汽車が動き出した。あたしは、ひざの上にお弁当を置いて、食べ始めた。前の青年は、横目で、あたしを、盗み見ながら、サンドイッチを食べてる。

富士山には感心したが、その他の点では、郷里よりまさつてることに、まだぶつからない。例えば、この青年のような男は、あたしの郷里、大分県豊前国宝珠村に、一人もいない。この男は、昨夜、岡山から列車に乗り込んできたが、あたしの前へ席をしめると、五分もたたないうちに、話しかけた。

「僕は、東京大学の学生です。暑中休暇に、四国方面を旅行して、その帰りなんですがね……」

と、頼まれもしないのに、自己紹介をする。それがすむと、

「あなたは、どこの学校ですか。女子大ですか、それとも女子医専ですか」

と、うるさくひとのことを聞く。少ししゃくにさわったから、

「学生ではありません。教師ですわ」

と、返事してやったら、ヘラヘラ笑って、信用しない。

こういう男に、何をいっても、しょうがないから、それ



きり黙ったが、あたしは、うそはいわない。あたしは、東京の大都女学校の教師になるために、上京の途中なのである。

もっとも、その女学校が、どんな学校で、どんな町にあって、また、どんな授業を受け持たされるのだから、いっさい知らない。すべては、郷里の先輩の小林秀子さんに、まかしてある。秀子さんが、今度、結婚して、学校をやめるので、その後任に、あたしを推薦してくれたのである。

あたしは、東京へ初めて行くのだ。大阪と京都は、修学旅行で知ってるが、それから東は、今度が初旅である。でも、心細いことなんか、ちっともない。東京なんか、ちっともこわくはない。はばかりながら、いなかでいたって、近代的な日本女性の教養は、たっぷり受けられるのだ。ばかにしてもらいたくない。

いつか、汽車がトンネルへはいった。恐ろしい長いトンネルだ。いつまでたっても闇の中をゴウゴウと走ってる。少し心配になってきた。

「長いトンネルなこと」

あたしは、思わず、つぶやいた。

「旦那トンネルですよ。あなた、知らないんですか」
前の青年が、また、話しかけた。

「ええ」

「すると、あなたは、初めて上京するんですね」

「ええ」

「宿は？」

「まだ、きまっていますよ」

「それあ、いけない。東京の旅館は、危険ですからね。うつかり泊まると、ひどい目にあいますよ。どうです、僕のアパートへ来ませんか。郊外で、とても静かな、いい所ですよ」

青年は、にわかに、座席を乗り出して、ねこなで声を發した。あなたの方がよほど危険だと、いいたかったが、やめておいた。しかし、東京は、まったく油断がならない。婦人雜誌によく出ている、「列車中の誘惑」というものを、こう早く経験しようとは、思わなかった。

そろそろ、車内が、暑くなってきた。九州も暑いが、東京もなかなか暑いらしい。もう九月だから、夏物はあまり行李へ入れて来なかったが、困りはしないかしら。

「あと一時間で、東京着ですよ」

青年は、そういつて、洗面所の方へ立つて行つた。先刻小田原を出たばかりだから、まだだいじょうぶだと思つていたが、なるほど、腕時計は、八時三十分をさしている。

一時間後に、東京！ 大東京！

あたしは、急にソワソワして、降りじたくを始めた。といつても、旅行案内と、雑誌と、扇子をかばんの中へ入れたら、もうすんでしまった。それでは、あまりあつけないから、スカートのほこりを払つて、襷を直した。黒のスカートと、白のブラウスの、あたしの服装は、東京では、あ

まり地味過ぎるかしら。そういえば、あたしは、けさ、顔を洗つただけで、ちつとも、お化粧をしていない。お化粧をしないと、東京では、失礼に当たるのではないかしら。実は、ハンドバッグの中に、コンパクトがはいっている。母親が、村から一里ほど離れた、N市の洋品店へ行つて、お餞別に買つてくれたのである。その使いはじめを、やつてみてもいいが、なんだか恥ずかしい。生まれつき、お化粧のきらいな性分だから、こういう時に困る。人中で、鏡をのぞくなんて、裸を見られるより恥ずかしい。

「とても、混んでいます」

洗面所から、青年が歸つて来た。とたんに、ブーンと、いい匂いがした。見ると、まあ驚いた。きれいに顔をそつて、その上に白い粉がすり込んであつて、まるで、女が薄化粧をしたみたいだ。髪の毛はぬれたように油で光つて、真つすぐに櫛目を通っている。男でも、こんなにおしゃれをするのだから、あたしも東京へ行くと、地膚主義が守れなくなるかもしれない。いやだなあ。

横浜へ着いた。東京の玄関だというのに、それほどりつぱでない。この分では、東京もたいしたことはないかもしれない。十分か十五分して、列車が、ある鉄橋を渡ると、「もう、東京市内です」

と、青年が教えてくれた。畑や農家があつて、宝珠村の景色と、あまり変わらない。こんな東京なら、いよいよ恐るるに足らないと思つてると、だんだん人家が、多くなつ